

スクーリングでの「表現」の授業のあり方

—2日間の集中講義での学び—

中島美保 合田弥生

How to teach 'expression' in schooling -Learning in an intensive lecture for 2 days-

Miho Nakashima Yayoi Gouda

Abstract

The aim of the class “Music Expression” is that nursery school teachers learn about music expression widely in order that students can express music freely in their daily lives by making students open their minds, bringing their personality out, making them feel enjoyment, exciting, or sometimes nervous through music.

Thus, we hope that each of nursery school teachers are able to happily, clearly and widely express such a singing, finger-playing, beating rhythm, ensemble, chorus or play with full knowledge of basic music such a time, rhythm, interval, speed, and key(positive key or negative one).

We want to teach these basic knowledge to the students who want to be a nursery school teacher but don't specialize music through the two-days-classes “Expression II” setting the goal “easy to understand, not boring, merrily and rich in content”, and we want to make good use of our lectures by looking back our lectures of content which has a sense of fulfillment and the response of students.

Keywords: Musical expression, Basics of music, Fun lessons,
Schooling of correspondence education, Sense of fulfillment

I はじめに

近畿大学九州短期大学通信教育部の保育科では、通常は自宅学習をして、定期的にレポートを提出する事が大半であるが、実践を必要とする教科として、音楽関係に関しては、1、2年次に「音楽Ⅰ（ピアノ、声楽）」「表現Ⅰ」、3年次には「表現Ⅱ」のカリキュラムが設定されている。そのため、スクーリングを受けに、わざわざ遠くから本校に足を運ぶ受講者が多くいる。平成28年度と29年度の夏休み中に、本校との連携校である専門学校の3年生を対象に実施した通信スクーリング「表現」の授業では、1クラス20名程の学生

が、まる 2 日間 720 分（90 分授業×4 コマを 2 日間続けて）を、通しで受けている。これは、授業をする方も受ける方も、かなりハードなことであると思われた。

本校の通信教育部の音楽の専任講師として就任し、未経験である「音楽表現」の授業をするにあたり、何をどうすれば良いのか暗中模索をしながら、2 年間同じ専門学校の 3 年生を対象に実施したが、幸いなことに、二人の講師で授業を担ったので、特に初めての年度は、二人で話し合いを重ねて内容を練り、指導案を作成し、授業の流れをシュミレーションして臨んだ。たった 2 回の授業しか実施していないのだが、同じ 3 年生でも、年度によっての質の違いが良く分かり、また担任の先生にも終日ご参加いただき、講師の二人にとっては、充実感のある思い出深いものとなった。

保育科の音楽に関する「表現」の授業の狙いは、音楽を通していかに子どもたちの心を開かせ、個性を引き出させるかであろうと考える。人前で表現する楽しさ、ワクワク感、時には緊張感を味わわせたい。人前で話すことが苦手でも、歌や踊りは好きで得意な子どもたち、一人では上手に表現できなくても、みんなと一緒にいたら発言したり、身体を動かしたりできる子がいるであろう。その子の性格を活かし、得意な事は更にのばし、不得意な事も形体や方法を変え、その子の表現したい心の扉を閉ざしてしまわない様に、保育士はあらゆる体験と多くの知識が必要であると思われる。その為には、音楽の基本的な拍子・リズム・音程・速さ・調（長調、短調）等の知識を理解して、表現の幅を広く持ってほしいと思っている。

その基本的な知識を、音楽が専門ではない保育士を目指す学生に、2 日間の「表現Ⅱ」の授業において、「解り易く、飽きずに楽しく、内容は濃く」を目標にして、達成感と充実感のあった授業内容と、学生たちの反応を振り返り、今後の授業に役立てたいと考える。

Ⅱ 2 日間の実施形態、内容

対象学生：京都保育福祉専門学院 専修科三年生 1 年目…21 名(男子 7 名、女子 14 名)
2 年目…18 名(男子 5 名、女子 13 名)

実施日 : 1 年目…平成 28 年 8 月 3 日、8 月 4 日
2 年目…平成 29 年 7 月 31 日、8 月 1 日

実施時間：720 分（2 日共に全日 1～4 時限授業）

実施内容：1 日目 1 自己紹介
2 拍子・リズムの理解
3 音の高低・長短・速さ・ダイナミックの理解
4 疑似、反復の学習
5 ハンドベル演奏体験
6 手遊び・指遊び
※ 本日のまとめ
2 日目 7 正しい発声法・音程の理解・合唱体験

8 小音楽劇（小オペレッタ）体験

9 合奏体験

10 ボディパーカッション

※本日のまとめと、2日間の感想

Ⅲ 授業内容

1. 自己紹介

目的…自己紹介では、前に立って紹介をする学生は、新しく担任を持った保育士や幼稚園教諭となり、される側の学生は園児となっていく。園児たちにいかに簡潔に、興味ある言葉や動作でアピールできるか、いかに早く相手に自分を印象つけ覚えてもらえるか、子供たちに先生として興味と印象を持ってもらう為の練習である。3年生はすでに保育士資格を取得し、幼稚園教諭の資格を取得するために、このスクーリングを受けに来ていることから、保育実習の経験が有り、すでに福祉現場でアルバイトをしている学生も少なくないので、あえてこの設定とした。

①自分が園児に呼んでもらいたい名前（苗字、名前、あだ名等）を決め、その呼び名を大きく書いて名札に貼り付ける。

*実際の名札名…伊藤彩乃→**いとー**、徳田睦美→**むっちゃん**、西村智哉→**にっしー**、八十島智香→**やそ他**

*上記の様に、子どもが呼びやすい呼び名を考えている学生が殆どであった。

②自己紹介する学生は、保育士。他の学生は皆、園児と想定する。時間制限はないが、園児たちから興味を持たれるような、インパクトある表現が必要である。

歌、手遊び、語り、ダンス、どんな形でも良い。また自己表現は、自分の長所や特技だけではなく、時には敢えて苦手な事を面白おかしくすることで、印象付けるのも手法であると思われる。

♪実際の自己紹介…体育会系→得意な動作を実際に披露する

（ブリッジ、バク転、側転、片手腕立て、エアーバスケ 等）

音楽系→園児の知っている曲を歌う、ものまね、手あそびを披露

（ミッキー、猫などの物まね、手遊びキャベツ、等）

視覚系→小さな細かい動作で表現アピール

（目玉リレー、即座に絵を描く、等）

*殆どの学生は、自分の得意とする事で自己アピールしていた。講師の私達は彼らに初めて会うので、堅苦しく型にはまった自己紹介ではなく、印象ある自己紹介してもらったことで、和やかで笑いのある時間となった。その学生の雰囲気や性格の一部も垣間見られて、取り掛かりとしては、とても良い自己紹介方法であった。

2. 拍子・リズムの理解

目的…音楽には必ず拍子がある。(2拍子、3拍子、4拍子など)また、その拍子に基づくリズム感(強拍や弱拍)によって、音楽が生き生きとしたり、平坦になったり、美しくなったり、重くなったり、軽快になったり…と様々な表現が生まれる。

保育士が、拍子やリズムを理解して、自ら感じながら歌ったり伴奏したりすることで、園児たちの様々な想像力を引き出す事が出来ると思う。そのためには、確実な理解や体感が必要であるし、歌や音楽に合わせて、調子の良いリズム感で、身体を自然に動かせることが大切だと考える。

①歌と体の動作が一致する様に、ボールを1人ずつ持ち、「あんたがたどこさ」を歌いながら、歌に合わせてボールをつく。

うまく歌とボールをつくタイミングが合う様になったら「あんたがたどこさ」の「さ」でボールを足でくぐらせる。

次に、全員が1つの輪になり、ボールは左手に持ち「あんたがたどこさ」を歌いながら2拍子で、右手で自分の左手にボールをつく。その時、歌の歌詞の「さ」の歌部分の箇所のみ、ボールを右手で自分の右隣の人にボールを送る。自動的に自分の左横の人からボールが左手に送られてくる。それを歌の最後まで続ける。右回りが出来たら、次に左回りもやってみる。

*この実践では、本来ボールをつくことが苦手な学生が居た。その殆どが歌は歌えるが、ボールをつくリズムが身体と連動しておらず、「さ」のところでの足くぐりや、輪になりボールを送るタイミングを掴むことが、難しそうであった。しかしながら、自分が失敗すると隣の人や皆が困るので、一生懸命にそして楽しそうに、全員が一丸となって練習をしていた。

②3拍子のリズムの取り方

3拍子の殆どは1拍目が強拍で、2、3拍目は弱拍のワルツ系の拍子であり、身体が横に揺れやすい気持ちの良い拍子である。元々、日本語自体が2拍子系統の言葉であり、日本人は3拍子が苦手であると言われることがある。子どもの歌や唱歌に3拍子の曲が少ないのは、子どもは横揺れよりも、元気の良い縦揺れの2拍子や4拍子のマーチ系やスキップ系を好むからであろう。だからこそ時には、優しく横揺れのする曲に触れるのも、子どもの優しく美しい表現力を引き出すためには必要である。

2人1組でボールは1個、3拍子の曲に合わせてボールを相手に投げ渡す。

1拍目→足を踏み出し 2拍目→ボールを投げる 3拍目→もう一人が受け取るを、学生は耳慣れた曲を歌っている間ボールのやり取りをする。

♪使用曲…バイエル33番・うみ 等

*学生たちも3拍子は難しく感じたのか、身体の動きが不自然で、ぎくしゃくしながらボールを渡している様子であった。3拍子は、大人も馴染むことが難しい拍子である

だけに、子どもの頃から慣れ親しみ、身体に拍子感覚を身につけさせることが大切だと考える。そのことによって、より一層表現が豊かになり、心の成長にも役立つと思われる。

③ 4拍子のリズムの取り方

4拍子は、縦揺れ系のマーチやスキップ系で、子どもが歌いやすい、また身体を動かしやすい、元気の良い曲が多く、日本人の身体や心に反応しやすい拍子である。

学生たちにも馴染みやすい拍子なので、色々なバージョンで4拍子を体感させることを試みた。

4拍子は1拍目が強拍、2拍目が弱拍、3拍目が中強拍、4拍目弱拍である。1拍目が強拍という事を理解するために、1拍目はジャンプ、あとの拍は手拍子にし、大げさに強拍を表現させることで、元気の良さを感じさせる事に視点を向けさせた。

- ・全員が1つの輪になり、真ん中を向き合い、曲に合わせて全員が同じ動作でジャンプ、手拍子をする。

1拍目→ジャンプ 2・3・4拍目→手拍子

- ・次は4人1組になり、それぞれ拍の役割でジャンプ、手拍子をする。

1人目→ジャンプ、2・3・4人目→1人ずつ手拍子

- ・それが出来たら、次に1人ずつ役割順番をずらしていく。

1人目→ジャンプ、2・3・4人目→1人ずつ手拍子

2人目→ジャンプ、3・4・1人目→1人ずつ手拍子

3人目→ジャンプ、4・1・2人目→1人ずつ手拍子

4人目→ジャンプ、1・2・3人目→1人ずつ手拍子

- ・それを曲が終わるまで繰り返し役割順番をずらしていく。

次はそれを、全員が1つの輪になった状態で4拍子の曲を歌いながら、途切れないように歌ってジャンプと手拍子をし、曲が生き生きとなることを感じてもらう。少し難しくなるが、2、3、4人目の人が前の人の肩に手をかけ、最後には円になると言う動きも試した。

♪使用曲…ミッキーマウスマーチ・手をたたきましょう・あり 等

*学生たちは、固定した4拍子はすぐにでき、身体の動きや手拍子も上手くできていたが、役割や順番をずらすと、反応の鈍い学生は、頭で考えてしまうので、遅れたり間違えたりしていた。しかし何度か練習をするうちに、自然と身体が反応し、最後には皆リラックスした表情で元気よくジャンプ、手拍子をして、4拍子を感じていたと思われた。拍子全般に於いては、頭で考えるよりも、まずは自分自身が体感する事が大切であることを、ここで学ぶことができたと思う。

3. 音の高低、長短調、強弱、スタッカート、レガート等、の理解

目的…どんな音にも、様々な表情がある。ピアノ等の楽器だけではなく、生活に溶け込

んでいる自然の音、例えば犬や猫、小鳥等の動物の鳴き声、風や川等の自然の音、車や電車の音、また想像で感じる、おぼけ、宇宙などの音が思いつく。

そんな音に耳を傾け、その音から湧き出るイメージを自分の心に描き、さらに身体の動きで表現をすることで、個々の想像力を大きく広げていく事を目的とする。

①講師がピアノで色々な音を出し、それを聴いた学生が、それぞれ自由に動き回り、感じたまさを表現する。

高音でトリルを弾くと	→	小鳥・蝶々・小川のせせらぎ・星の光	等
低音でゆっくり弾くと	→	ぞう・ライオン・うし・お相撲さん	等
半音階でゆっくり弾くと	→	おぼけ、不安な人・悲しい人	等
半音階で速く弾くと	→	電車・飛行機・急流な川・等	
グリッサンドで弾くと	→	台風・慌てた人、パニックの人・洪水	等
付点のリズムで弾くと	→	ウサギ・カエル・馬	等

*学生たちは、最初は慣れず動作がぎこちなかった感じであったが、徐々に心を開放してそれぞれが感じるままに動き表現していた。音を聴いて感じるままの動作は、それぞれ違いがあり、それは子どもたちにも言える事である。固定観念の無い自由な表現は、個々の広い人格形成と深く関わっていると思う。

②誰もが知っている曲をピアノで弾き、同じ曲で

長調⇔短調 スタッカート⇔レガート 速い⇔遅い 強い⇔弱い 等

反対に演奏し、イメージの違いを感じ、表現する。

♪使用曲…メリーさんのひつじ、キラキラ星、ぞうさん 等

*学生たちに、楽譜に示している色々なダイナミック記号や、速度記号、音楽用語の大切さを理解してもらう為に、極端に反対の演奏で試したが、こんなにもイメージが変わるのか…と驚き関心をもっていった。実際の現場でも、楽譜に書いている音楽用語、ダイナミックは見逃さず、子どもたちに歌や器楽を教えてほしいと願う。

4. 疑似、反復の学習

目的…乳児、幼児の時期は、見たもの聴いたものを、まず真似する事で、笑ったり、しゃべったり、手足を動かしたり…と色々な事を徐々に学習し、次第にその真似に自分の感情や独創性を入れ始め、個々の違った「表現」に発展していく。







1人1人の乳児、幼児が個性豊かに成長するために、真似をする事の大切さ、真似が出来ることの素晴らしさを学生に体感させ、その真似を日々反復する中で、楽しく、尚且つ、音楽的な要素の拍子・リズム感なども、同時に子どもに身につけさせることを学ぶ事を目的とする。







①「やまびごっこ」の歌を講師の歌ったとおりに「真似」してもらい反復唱する。

歌いながら、歌詞に合った動作をつける。

② 「しりとり」拍、リズム感ある「しりとり」をゲーム感覚で楽しむ。(円になって座る)

手を2つ叩いて(2拍子)しりとり… あ め →  め が ね →  ね こ

手を3つ叩いて(3拍子)しりとり… き つ ね →  ね ま き

→  き い ろ →  ろ う か

それらが、出来る様になったら、色々なリズムをつけた童歌風のしりとりゲーム、しりとりではなく、お題を「動物」や「食べ物」「県名」等にして、リズムが滞ることなく回していく。子どもたちの年齢に合わせて、内容を変えることができる。

③ 「リズムの真似」サウンドシェイプを使い、1人の学生の叩いたリズムを全員が真似して叩く。何拍子でも、どんなに複雑でも良い。とにかく同じリズムを叩く。

④ 「複数のリズム打ちと、リズム合奏」下記のリズムの様に2つ以上のリズムうちの真似をし、グループ分けをして、複数のリズム打ちを同時にする。最初は2つのリズム組み合わせから始め、段々リズムを増やすと良い。真似プラス集中力のいる作業です。



*①～④通して「真似」とはいえ、学生たちはとても集中して一生懸命に、また楽しそうにしていた。だだの「真似」「しりとり」でなく、それにリズムや歌がつくことで、単調にならず、飽きずに長時間取り組むことができた。学生たちの真剣な目と笑顔溢れた表情が印象的であった。

5. ハンドベル演奏

目的…実際に保育園や幼稚園でハンドベルを使用し、発表会や普段の取り組みに扱っている園も多くある中、保育士自身にハンドベル経験がない人も多い。

学生生活のうちに、多人数だから出来るハンドベル合奏をすることで、ハンドベルの音色の美しさと、合奏することの楽しさや喜びを味わわせたい。またその経験を、実際の現場で生かしてほしいと思い、この時間を設定した。

① 「虹のかなたに」2部合奏 上段15音(11人)下段18音(7人)で構成

全ての音に階名を書いた楽譜を渡し、ピアノで2つのパートのメロディーを弾き、どんな曲なのか聴く。

②次に全員で、2パートどちらも階名で歌う。

③簡単に曲やパートの説明をし、11人と7人の2グループに分かれる。

④1人が1音～3音を担当する事を説明し、各グループで話し合い、それぞれ担当の音を決め、自分の音には蛍光ペンでマーキングする。

⑤ベルの取り扱い方を説明してから配り、鳴らし方を説明し、各グループとも低い順に鳴らしてみる。

- ⑥曲を階名で歌いながら、上段部パートのみをベルで鳴らしてみる。次に下段部のみ。
- ⑦質問等をうけ、各自練習し、それぞれが出来たらグループ毎に練習（約 30 分）
- ⑧全員で 2 部合奏
- ⑨演奏した感想を一人ずつ発表して、反省点、改善点を意見交換し再び各自、各パート練習。
- ⑩再度、全員で 2 部合奏。録音する。
- ⑪録音を聴き、1 人ずつ感想を言ってもらおう。

*ハンドベル演奏は初めての学生がほとんどの中、ベルの綺麗な音、皆で協力し自分のパートが完成し、それにもう 1 つのパートと合わせた時の、重なり合った音の綺麗さ、ハーモニーの美しさを感じることができて、全員が感動した様子だった。自分たちの演奏の録音を聴き、短時間で皆と協力し、一生懸命取り組んだ満足感と、達成感で、全員が笑顔で自分に拍手をしていた。

6. 手遊び・指遊び

目的…楽器や道具を使わなくても、自分の指や手足、体を使い、歌や音楽に合わせイメージした表現で、子供達の創造性を養い広げていく事を目的とする。

- ①「あたま かた ひざ ポン」や「大きな栗の木の下で」「鬼のパンツ」を歌いながらお決まりの動作をして体を動かす。それを幼児に教えると仮定して、最初は二人組で、次は自ら前に出て先生になって、実際に演技をしてもらった。それぞれの個性が出ていて、見ている学生たちは幼児になりきり、色々な面白い発言をしていた。
- ②「いっぽんばしにほんばし」の歌は、左右 1 本ずつから、2 本ずつ～5 本ずつまで、どんな形を創造、連想するか、人それぞれであり、自分バージョンを作って披露してもらった。

教材等での一般的な例と、それ以外の独自の発想の例。

- 1 ほんばし…おやま、おにさん
- 2 ほんばし…かにさん、うさぎさん、めがね
- 3 ほんばし…おひげ、カラス、くらげ
- 4 ほんばし…くも、わんこ、おひげ
- 5 ほんばし…ちょうちょ、ことり、人間、おほしさま、おばけ、ひこうき

- ③「10 人のインディアン」を指おりしながら歌う。（普通バージョン）

♪ピクニックバージョン

- 1 と 5 で たこ焼き食べて
- 2 と 5 で 焼きそば食べて
- 3 と 5 で ケーキを食べたら、用意はいいですか？「いいです！」
- 3 と 5 で スパゲティ食べて
- 4 と 5 で カレーも食べて

5と5で おにぎり作って ピクニック 「レッツゴー！」

♪ポケモンバージョン

1本と1本で ピカチューになって

2本と2本で クラブになって

3本と3本で ニャースになって さとしになっちゃった～

4本と4本で コダックになって

5本と5本で モンスターボール作って

ポケットモンスター揃ったら、準備はいいですか？ 「ゲットだぜ！」

*手遊びは幼児にとって最も身近な音遊びであり、色々な想像力を養い、動作を覚える手段として楽しく日常的に親しまれる教材である。学生たちも気軽に楽しんで歌って踊っていた。特に手遊びの10人のインディアンの「ピクニックバージョン」「ポケモンバージョン」は好評であった。

7. 正しい発声、音程、合奏

目的…殆どの保育園、幼稚園では、毎日歌を歌う時間があるが、園によっては、外での遊びや運動、園内での本の読み聞かせや話、また絵を書いたり、勉強したりと中身が盛りだくさんであり、音楽の指導まで行きつかないのが現状ではなかろうか。例をあげれば、歌を歌うとき、先生はつい「大きな声で元気に歌おう」と、言ってしまうがちのようだが、その時に無理のない声の出し方や、音程を正しく取る事までを考えて、指導に当たっているだろうか。正しく音程を取るためには、単に声を出す事よりも、自分や人の声、伴奏楽器の音を、耳で聴く事が大切である。他の子どもに負けないように大きな声を張り上げて歌うと、他の子の声は勿論、自分の声すら聞こえず、音程に注意せず、ただ「歌詞を叫んでいる」だけで、「歌」にはならないだろうし、実際にそのような園児を沢山見てきた。そのまま小学校入学してからも、正しい音楽教育を受けることがないならば、不確かな音程で歌う子どもを、作ってしまう事になりかねない。幼少期に聴く音が、発達した良い耳を育てると言われているが、特に若い親たちが、昔から歌い継がれてきた唱歌や童謡ではなく、今どきの音程がはっきりしないラップ調の歌を、スマホ等で子どもに聞かせる光景を見ると、子どもたちの将来を憂う気持ちになる。家庭で出来なければ、せめて幼稚園、保育園の中で、自分の声を自分で確認できる様な「発声」と「音程」の訓練をする必要性を感じる。そのためにも、保育士自身が、正しい発声、音程の訓練をした上で、現場で子ども達の「歌」の指導に当たってほしいと強く願う。

①正しい発声や音程を必要とする理由を、学生に説明する。

上記の「目的」に記載している事を説明し、人間の目、耳、口、声帯、脳、筋肉や骨、それら全て連携されている事、子供は見たもの聴いたものの「真似」から学ぶので、保

育士が正しい音程で歌って聴かせる事を、まずは認識させる。

- ②音階の練習 ドレミ…の正しい音階を全員でうたう。
- ③和音の練習 ハ長調 I (ドミソ) IV (ドファラ) V (シレソ) の和音を発声しハーモニーの美しさを感じる。
- ④輪唱の練習 「かえるのうた」「かね」を斉唱→輪唱→転調 (C・D・E・F) で歌う。
「大きなうた」を講師に続いて斉唱で歌う→手話の振付をつけて歌う (3番まで)
その時、出来るだけ歌詞の意味を考え、歌、振付に感情を込める。
- ⑤合唱 「ビリーブ」を混声3部合唱する

まずは講師が、ソプラノ、アルト、バス、それぞれのメロディーを歌って聞かせる。

ソプラノ (女子7人) アルト (女子6人) バス (男子5人) に分かれ、各パート練習。

ソプラノにはピアノの弾ける学生を中心に練習。アルト、バスにはそれぞれ講師がついて正しい音程を取る練習をする。ある程度練習出来た後、ピアノ伴奏付きで3部合唱する。

音程やリズムが解らない、音が取れない、他のパートにつられる箇所は、部分的に練習し何度か繰り返す。

再度、3部合唱を録音しながら歌い、録音を聴き、自分たちの声が客観的にどう聴こえているか確認し、ハーモニーの美しさや、3部のバランス、歌詞に込められた意味や感情、歌詞の発音に注意しながら録音し合唱を仕上げる。

*学生たちの中には、中学で歌った事のある曲だった為、すぐに歌うことができたようだが、正しい音程や発声で歌う事で、3部合唱のハーモニーの美しさを感じる事ができた。更に歌詞の意味を考えて感情を込めて歌うことで、思わず涙腺の緩む学生もいた。また録音した事で、学生たちは真剣に取り組み、良き記録と思い出になった事と思う。

8. 小音楽劇 (小オペレッタ) を体験する

目的…卒業年次に、オペレッタを経験する専門学校は多いし、今回の学生たちも、2年次でオペレッタを経験して来ている。それは恐らく大掛かりな物であり、練習や大道具、小道具、衣装等の準備にも時間がかかり、大変な労力を費やした事と推察する。

そこでスクーリングでは、園児達が気軽に楽しめるオペレッタを取り入れた。

ここでは、衣装や舞台を簡単にし、子どもたちに馴染みある童話を教材に、数時間の練習で仕上がる「小オペレッタ」を体験することで、豊かな表現を創造し、オペレッタを身近な教材として、現場で実践して行く事を目的としたい。

- ①「おおかみと七ひきの子やぎ」(グリム童話) をする事を伝え、9人の2グループに分かれる。

②台本楽譜を配布し、まず講師が台本通りに、台詞やト書きを読み、物語のあらすじを理解させる。

③グループに分かれ、キャストを決める。(ピアノは出来ないなら講師が務める)

おかあさん…1人 7人の子やぎ…6人 おおかみ…1人 ナレーション…1人

準備品…お母さん用→白手袋・エプロン・買い物籠・ハサミ おおかみ用→おおかみ耳
子やぎ→やぎの耳・可愛いリボン

④グループに分かれて練習(約45分間)

各グループの創造性を活かした劇になる様、道具、振付、台詞、ナレーション等は自由に考えさせ、子どもになりきって、大げさな表現を心がける様にアドバイスする。

教室にある、机、椅子、棚、楽器、ボール等の全ての物を有効に使い、家のドア、玄関の様子、また部屋の様子などを工夫して設定させる。

⑤2つのグループの小音楽劇を披露して、お互いに鑑賞する。意見交換し、講師が講評する。

*劇の台本自体が、園児用に書かれているので、台詞も音楽も分かりやすく作られている。学生たちは2つのグループとも、とても楽しく練習していて、おかあさん役、おおかみ役は、物語のイメージ通りの感じだったが、6人の子やぎ役に関しては、2つのグループがそれぞれの特徴を出すために、色々な工夫をしていた。台詞の言い回しに、男女や年齢の差、性格の違いが出ていて、とても興味深く鑑賞できた。同じ題材の劇をしているのに、舞台設営や台詞の言い回しに違いがあり、ミュージカル風に歌う、関西弁を使う等、どちらも良い特色を出していて、指導する方も楽しむことができた。特にオオカミのお腹から出てくる場面では、アドリブでの台詞が多く聞かれた。皆で協力し、短時間で1つの事を創り上げて発表するためには、個々の協調性が不可欠であるが、2つのグループとも、皆で意見を言い合い、色々なパターンの動作をしながら、短い時間で仕上げることができた。何よりも学生達自身が、一番楽しんでいたのでなかろうか。

9. 器楽合奏

目的…歌だけでなく、楽器を演奏しながら歌う事は、身体全体で感じる音楽的反応の発達を促す事に繋がる。この器楽合奏では、楽譜に示された楽器や、編成にとらわれる事なく、色々な想像力を働かせ、子ども達に興味を持たせるような合奏曲になる様、学生達の自由な発想を取り入れ、躍動感にあふれ、身体とリズムと旋律が一体化する「身体にシックリいく音楽」を、自分たちで作り上げる事を目的とする。その為に、馴染みやすい曲、想像力の沸く曲として、今回は「南の島のハメハメハ大王」を選択し、小音楽劇で行ったように、2つのグループに同じ楽譜を配布して、グループで話し合っ、担当の楽器を決めて練習をし、発表し、お互いに評価する。

- ①「南の島のハメハメハ大王」の合奏楽譜を配り、まずは4番までを皆で歌う。
- ②教室にある楽器を全て使用可にし、楽器の種類と数、特徴を伝え、実際に音を鳴らしてイメージをもたせる。
- 楽器の種類 カスタネット・タンバリン・トライアングル・ウッドブロック・マラカス・カバサ・ギロ・小太鼓・大太鼓・シンバル・マリンバ・鉄琴・ギター・他
- ③全員で、それぞれのパートの基本リズムを、手拍子で打ってみる。
- パート分けし、実際にどんな合奏になるか、手拍子と歌で曲を流し、それぞれイメージしてもらおう。
- ④グループに分かれ、使用楽器の選定、担当楽器編成等をそれぞれ話し合い、練習にとりかかる。(約40分)
- 楽器編成については、楽譜記載の楽器や基本のリズムにこだわらず、演奏していて楽しい音楽、体に馴染む音楽になる様、自由にアレンジをして良い。
- ⑤2つのグループの合奏を発表する。
- お互いのグループの感想を言い、講師の批評も付け加え、お互いの良い所、自分たちの足りない所を認識し、再度グループ練習をする。(約20分)
- ⑥2回目のグループ合奏
- それぞれの演奏を録音し、録音を聴いたうえで、自分たちが楽しんで演奏できたか、曲のイメージに合った楽器選定、編成ができたか、自分たちならではの特徴を出すことができたか等を、まず自己評価し、お互いの感想を言い合う。
- ⑦それぞれの個性ある2つのグループの合奏を、全員で合同合奏する。
- 講師が少し手を加え、曲に合ったテンポ、リズムに指導し講師の指揮で皆で歌いながら合奏。

*学生たちは、それぞれ得意な楽器を選び、今までに触った事や鳴らしたことがない、ウッドブロック・マラカス・カバサ・ギロ・マリンバ等の音に感動し、初めての楽器に触れたい、鳴らしたい、これで合奏したいという興味を持ち、目を輝かせながら練習に挑んでいた。打楽器を演奏しながら踊ったりする学生もいて、劇で使ったりボンと頭に巻いてみたり、存分に気持ちを発散出来たと思われる。きっとこの心情は、子どもたちにも共通する事であり、新しい楽器の音には興味が沸くであろう。その興味に応えるべく、保育士や幼稚園教諭には、沢山の知識と経験が必要であると感じた。合奏曲が「南の島のハメハメハ大王」であったこともあり、グループ内の和やかで協力的な雰囲気の中、本当に南国に居て演奏するような、落ち着いて楽しさのある合奏に仕上がった。

10. ボディパーカッション

目的…楽器を使わず、自分の身体が楽器となり、体の色々な部分の音を鳴らすことで、リズム感や、機敏性、強弱感等を養う。時や場所、年齢や人数を選ばず、音楽に

合わせて身体表現をする事は、皆で合わせる一体感と共に、望ましい人間関係を育むことに繋がる。

♪使用曲…ブルグミュラー作曲「アラベスク」「貴婦人の乗馬」

講師の一人がピアノを弾き、もう一人が基本動作や楽譜を見ながらの指導に当たる。

・ボディパーカッションの基本動作

- ① 「手拍子」
- ② 「手拍子を打った後に、両手をそのまま上に伸ばす」
- ③ 「お腹を叩く・・・両手打ちと右手と左手の交互打ちがある」
- ④ 「膝を叩く・・・膝上の太腿あたりを叩く。両手打ちと交互打ちがある」
- ⑤ 「脛を叩く・・・両手打ちと交互打ちがある」
- ⑥ 「肩を叩く・・・両手を交差して両肩を叩く」
- ⑦ 「胸を叩く・・・両手打ちと交互打ちがある」
- ⑧ 「お尻を叩く・・・両手打ちと交互打ちがある」
- ⑨ 「足踏みをする」
- ⑩ 「ジャンプをする」
- ⑪ 「ウエーブ・・・脛打ち→膝打ち→お腹打ち等の動作を、流れるように行う」

*最初に「アラベスク」の練習をしたが、常に二拍子で足踏みをしながら、手拍子や肩、お腹、膝の流れで叩いていく。基本の動作をゆっくりと覚えさせながら、講師が掛け声をかけて音楽に合わせて仕上げていった。次に「貴婦人の乗馬」の練習をしたが、「アラベスク」よりもリズムが複雑になり、動作も早くて忙しいので、4小節単位で、ゆっくりと指導した。手拍子では付点のリズムが多く出て来るし、手拍子→肩→お腹→膝を一拍単位で叩かねばならない。また、三連符のところでは、膝からお腹までスライドさせる動作が含まれている。ボディパーカッションは、二年目に新しく取り入れた内容であるが、専門学校最後の3年生であり、連帯意識が強いクラスであったので、学生たちは積極的に号令を掛けながら、一生懸命に取り組んだ。最後に前に並んで皆でパフォーマンスをしたが、担任の先生も一緒に参加されて、楽しく締めくくることができた。

※終わりに

授業が終了し、学生たちに丸く円になって座ってもらい、1人ずつの2日間の感想と、今後の自分について発表してもらった。クラス担任の先生も、二日間一緒に全ての授業に入って頂き、時には場の雰囲気を一層盛り上げて頂いた事で、学生や先生との関係が、さらに深まったのではなかろうか。授業を受ける方もする方も、二日間と言う限られた時間の中で、精一杯の力を注いだので、疲れもさることながら、終わった後の充実感はひとしおであったようだ。すでに保育園や児童養護施設、障がい者施設等でアルバイトをしながら、学校に通っている学生も多く、将来を見据えた話を聴くことができた。

京都福祉専門学院3年生の「表現」の授業は、平成28年度と29年度の2回ほど持たせて頂いたが、残念ながら専門学校のカリキュラムが変更になり、3年次の表現のスクーリング授業は2回目で最後となった。

初めての年のクラスは、専門学校内でも、入学してから「この学年は最悪」と言われ続けて、怒られることはあっても、誉められることのない学生たちであった。担任の先生から休憩時間に、個々の学生の事情もお聞きしながら進めていったが、最初は何をするのだろうかと不安げな学生たちも、打ち解けるにつれて自分を表現出来るように変わっていったのが、良く分かった。また、授業の中では、その都度出来たことを評価して、褒め称えることに努めた。最初は無気力で覇気のなかった学生が、一生懸命にハンドベルを練習し、劇では怖いオオカミを演じ、合唱では特に男子学生が頑張ってくれ、最後は笑いと涙で終わった。秋になり寄せ書きが送られて来たが、「今まで誉められたことがなかったので、沢山誉めてもらえてとても嬉しかった」と書いてあり、誉めて伸ばす事の大切さを感じた。

初年度とは打って変わり、二年目のクラスは纏まりが良く、意欲的な学生の多い学年だったので、初年度の中身を深く掘り下げて、少しずつ変えてみた。初年度の学生は、休憩時間に観察すると、いくつものグループに分かれて、バラバラな感じであったが、二年目の学生たちは、18名が全員、団子のように固まって休憩をしていた事は、この学年の団結力を感じた。この年の学生達からもスクーリング授業から何か月も経って、一人一人の写真とメッセージが添えられた冊子が送られてきた。「スクーリングで練習した手遊びや、まねっこ遊びを、アルバイト先の施設でやったら、とても好評だったとか、一人一人が何かをイメージしてピアノを鳴らし、それを当てたりしたことが新鮮だった。これからの就職に向けて頑張りたい。」等、様々な意見や感想が書いてあった。

初めての授業であり、大変緊張した講師の二人だったが、学生たちから多くのことを学ぶ事が出来て、心の財産となった。

IV まとめ

保育士と幼稚園教諭では、前者は厚労省、後者は文科省の管轄となり、保育所は児童福祉施設であり、幼稚園は学校教育機関となる。今や「子ども認定園」が多くなっているので、両方の資格を持つことは、強味であろう。保育士や幼稚園教諭になって苦労するのは、子どもへの日々の接し方は勿論であるが、保護者への対応も難しいと思われる。子ども達にも保護者の方々にも、どんな分野でも、高い知識と経験があれば、信頼ある保育士としてきっと「好かれる・信頼できる保育士」としてのびのびと働くことが出来るであろう。

スクーリング二日間を通して、音楽の基礎知識をしっかりと学びながら、手遊び、歌、踊りを表現することは、確実な自信になり、自己表現力をより大きなものにできたのではないと思われる。またその上でグループ合唱、合奏、小音楽劇をした事は、基礎知識がある事でグループ内での意見交換の幅が広がり、レベルの高い表現、仕上がりに繋がった

事を感じたであろう。

2日間での集中講義で多くの学びをした経験を、実際保育士としての現場で、生かしてもらい、子ども達や保護者の方々に「好かれる・信頼できる保育士」になってもらいたいと願う。同時に、我々講師も常に基礎の大切さを再認識し、学生たちに興味深く、飽きさせず、熱意ある授業をし、打ち解けてもらえる人間性を持ち、備える努力が必要で重要であると感じた。

<参考文献・楽譜>

- ・思い出の歌を手話でうたおう 伊藤嘉子 編著/黎明出版 2000年10月10日
- ・幼稚園教諭・保育士を目指す楽しい音楽表現 奥田恵子 加藤あや子 菊池由美子
清 成美 田中恒雄 富田英也 平松愛子 共著/圭文社 2009年4月1日
- ・ダルクローズ教育法によるリトミックコーナー
坂野 平監修 神原雅之 野上俊之 編著/チャイルド本社/1987年5月初版
- ・手話によるメッセージソング ベスト25 伊藤雅子 編著/2008年4月13日
- ・みんなで手遊びワンツートン 妹尾美智子 市川恭子 共著/2007年1月30日
- ・ニューコーラスアルバム 北多摩中学校音楽教育研究会編集/教育芸術社 1997年2月
- ・ピアノでボディパーカッション 山田俊之編 /音楽之友社 2016年8月16日
- ・音楽ピアノ教本 平松愛子 編著/近畿大学九州短期大学 2016年4月1日
- ・ブルグミュラー25の練習曲 北村智恵 校定/全音出版社
- ・ミュージックベルをはじめましょう 熊原幹恵/全音出版社 2002年4月20日